



普段は暇なのだが忙しくなるとワツと忙し。まあ、やむをえないが、この間建築士の人に聞いてみた。だって、個人でやっている仕事って、しかも家を作る仕事なんてそんなにあるもんじゃあないだろうから、食っていけるんだろうか、普段はどうしているんだろうかなど何かとその生態が気になるのだ。そうしたらやっぱり普段仕事のない時は知人の事務所などへ遊びに行ったり人の作業を手伝いながら夕暮れになると「あー今日も電話がなかったな。」と思いつつ帰るんだ。年に2件から3件の仕事があればそのお金で仕事がない間細々とつないでいるのが普通だよ。と言っていた。まあ、そーなんだろうーと思います。しかしこんな仕事のやり方を続けていけるのは自分の時間を自分で

管理するという強い意志がなければならぬのでしょうか。しかしそうすると、私なんかは何しろ何十年も寝る間もないほど忙しく仕事を続けてきて、仲間も徹夜続きの末に鉛筆を握ったまま倒れて後頭部を打って入院などという生活を続けてきたのだから、空いた時間がある生活なんてまるっきり、きれいさっぱり経験がない。時間が空くとついおろおろしてしまうのだ。弱いものです。

そんなときにまた11月から12月までバングラでの作業があるとすると、英語が全くだめなもの忘れてすぐに手を挙げてしまい、まあ、また便所作りなのだが、さっそ現地ですら資料などをとことん作り始めてしまう。なにしろ準備をどこまでやっておくかで現場の成果は決まってしまうからやる時はやるのだ。土木の現場の先輩はよく「だんどり八分。」と言っていた。まあ、身に付いた働姿勢と、何か貧乏性というものはさう簡単には変わらないものです。

それと別の友人が前から言っているのだが、「それじゃあだめだよ。働かない仕組みをつくらなきゃあ、働かなくても仕事が進んでいく仕組みを作るようにしなきゃあだめだよ。」という言葉の意味もわかってはいるつもりなのだが、なかなかそうはいかないのだ。人それぞれに持ち場があるんじゃないかな。ただその持ち場が年齢と経験によって徐々に変化していくことに気付いて、それなりに新しい意欲で対応していかなければならないはず。でもよく会社内でベテランになって、それでも不満ばかりの人の話を聞いていると、たいがい、その自分の立場、持ち場が変化していることに気がつかない人が多い場合が目立ちます。単純には言えない話だけれども、たとえば一生かけて伝統工芸の一部をきわめて芸術にまで高めていくようなことは、自分の持ち場を守り抜くので良いのでしょうか、それでも後進の面倒をみてあげることが求められるはず。ましてや、複雑な人間関係で成り立っている「会社」に属しているのならもっと変化は劇的でしょう。そんな変化に対する鮮やかな対応をみんな求められているわけで、まあ、しんどい話です。「この道一筋でいいじゃないか。」と思うのですがそれじゃあ食っていけないのがつらいですね。

などとぶつぶつ言いながらも10月の29日30日は11時から代々木公園のNHKホールの周りで海外青年協力隊40周年記念のボランティア・フェスタです。万博と一緒に地球市民村をやったEVAA(エバ)のテントでバングラや世界の便所などの話をしたり、ネックス売りのあやしいおじさんになったりしている予定。いろいろなアジアやアフリカの料理の出店も出ますから、チャンスがあったら見に来て下さい。万博以来「万博やぐざ」と言われて最近なんだこんな事ばかりで、テキ屋になった気分です。まっとうな生活をしなきゃあとしみじみ思います。